

追放されて

В С С Ы Л К Е

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

『先生』と綽名あだなのついた老人のセミヨンと、誰も名を知らない若い韃靼人ダツタンが、川岸の焚火の傍に坐っていた。残る三人の渡船夫は小屋のなかにいる。セミヨンは六十ほどの老爺で、痩せて齒はもう一本もないが、肩幅が広くて一見まだ豊饒かくしゃくとしてゐる。彼は酔っていた。もう夙とつから寝たくてならないのだが、ポケットには酒瓶があるし、小屋の若者達にヴォト力をねだられるのも厭だった。韃靼人は病気で元気がなかった。檻ぼろ褌はらこにくるまりながら、シンビールスク県「県が廃止されるまでヴォルガ中流の右岸に臨んでいた一県。地味肥沃で、農産が豊かである。中心市はシンビールスク（現在のウリヤノフスク）」の素晴らしさや、郷里に残してある美人で利口な女房のことを話していた。年は二十五を越してはいまいが、いま焚火の明りで見ると、病氣やっ奪れの顔はいたましく蒼ざめて、少年のように見えた。

「そりや、ここは極楽じゃないさ」と『先生』が言った、「見たつて分らあね。水、裸かの岸、あたり一面の粘土、それつきりだ。……復活祭ももうとつくに済んだのに、河には氷が浮いているし、今朝なんか雪がちらついていた。」

「成つちやいねえ、まるで成つちやいねえ。」韃靼人はそう言つて、怯おびえたようにあたり

を見廻した。

十歩ほど向うを、冷たい暗い河が流れていた。河は低い呻き声を立てて、洗い窩められた粘土の岸を打ちながら、何処か遠い海へ急いで行く。岸のすぐ下に、渡船夫の間では平^カ底船と呼ばれる大きな舢^{はしけ}の影が、黒々と滲^{にじ}んでいる。遙か向う岸には、消えかけたり燃え上ったりしながら、蛇のように這う野火がある。これは去年の草を焼くのだ。蛇の向うはまたしても闇である。小さな氷の塊が舢^{はしけ}に突きあたる音がする。湿っぽくて寒い。……

韃靼人は空を見上げた。故郷と同じくらいたくさん星が出ている。それにあたりの闇も同じだ。だが何か足りないものがある。シンビールスク県の家で見た星は、こんな星じやなかった。空もこんな空じやなかった。

「成つちやいねえ、成つちやいねえ」と彼は繰り返す。

「今に慣れるさ」と『先生』は言つて笑う、「まだお前は若い。まだ馬鹿だ。脣の乳も乾いちやいない。馬鹿だもんだから、自分より不仕合わせな人間はないと思つている。だが今にきつと、こんな気楽な境涯はないさと独り言をいうようになる。俺を見てみな。一週もすりや水が退^ひく。そこで舢^{はしけ}を仕立てて、お前等みんなしてシベリヤじゆうをのして廻る。ところが俺は居残つて、こつち岸と向う岸を往^ゆき復^{かえ}りしはじめる。もうこれで二十二年も

そうやっている。夜昼なしにな。梭魚かますやネルマ鮭は水の中だが、俺は水の上だ。それもある難い神様の思召しよ。俺は何にも欲しくない。こんな気楽な境涯はないぜ。」

鞭韃人は粗朶を焚火へ投げ入れて、火のすぐ傍に寝そべった。そして言う。――

「俺の親父は病身だ。親父が死んだら、お袋も女房もこつちへ来る。そういう約束なんだ。
」

「お袋や女房を呼んでどうする」と『先生』がきく、「馬鹿げたことさね、兄弟。そりや悪魔の畜生が迷わすんだぜ。呪のろわれた奴の言うことなんかや、耳を塞いでいるんだ。奴の言いなりになつちやいけねえ。奴が女のことを言ったら、要らねえ！ って呶鳴り返してやれ。自由の身になりたくはないかと言ったら、要らねえ！ って突つ撥ねてやれ。何にも要りやしないんだ。親父もお袋も、女房も自由も、家も屋敷も、何にも要りやしねえ。そんなものは鬼にでも攫さらわれるだ。要るもんか！」

『先生』は瓶からぐつと飲んで、先をつづけた。――

「俺はね、土百姓じゃないんだ。下種げすの生れじゃないんだ。こう見えても助祭の息子でね、こんなことになる前にヤクルスクで、フロックを着ていたものさ。それが今じゃ、裸はだかで地面じびたに寝ても平気だし、草までむしやむしやられるまでになった。結局この方が気楽さ

ね。何にも欲しいとは思わねえ、何にも怖いとは思わねえ。自分じや、この俺様ほど金持で気儘な人間はないと思ってるんだ。ロシアからここへ追放されて来たとき、俺は初日はなからこう極めたんだ——何にも欲しくはねえ！　ってね。そりや悪魔めは、女房のことだの郷里くにだの自由だのって、色んなことで誘いをかけたさ。だが俺は言ってやった——何にも要らねえ！　とうとう頑張り通して、今じやこの通り苦情のねえ氣楽暮しよ。まあ悪魔の奴に氣を許して、一度でも言うことを聴いたら最後、もう駄目だ、救いはねえ。泥沼に脳天まで陥はまり込んで、這い上れやしねえ。……

「何もお前みたいな、脳味噌の足りない百姓だけたあ限らないさ。歴乎れっきとした、教育のある人間までがそうなるんだ。十五年前だったが、やつぱりロシアから立派な旦那が送られて来た。兄弟の間に財産を分けるとき、遺言詐欺か何かやつたんだ。公爵だとか男爵だとかいう噂もあったが、ただの役人だったかも知れねえ。分るもんかね。で、やって来るとまず手始めに、ムホルチンスコエに屋敷と島地を買った。『これからは』ってそう言うんだ、『額に汗して自力で食って行こうと思う。今じやもう旦那じゃなくて、一介の移民だからな。』『なるほど』って俺は言った、『そうなくてはなりません。神様の御加護がありますように。』まだ若いが、よく氣のつく働き好きな男だった。自分で草も刈るし、魚

も捕るし、六十露里ぐらいは平気で馬で飛ばした。ただ困ったことになったと言うのは、一年もたたぬうちから、グイリノの郵便局へ通い出した。俺の舁に乗りながら、溜息をついてこう言うんだ——『弱つたよ、セミヨン、しばらく家から金が届かないんでね。』

『お金なんか、ヴァシーリイ・セルゲイイチ』って俺は言つたさ、『要るもんですかね。あつたつて何になりますね。昔のことはさっぱりと忘れなせえまし。みんな夢だ、何もかもなかつたものと思ひ切つて、新規蒔直しにやるんですね。』またこうも言つたさ、『悪魔の言うことなんぞ聴いちや駄目でき。碌なことにはなりませんぜ。罫に陥るが落おちでき。今はお金が欲しいと仰しやる。だがもう少しして御覧なせえ、今度は何か別の物が欲しくなりまさ。そうなつたら限りきがねえ。仕合せになりたいたいんなら』って、そうも言つたね、

『一番大事なことは、何にも欲しがらねえことでき。そうですとも。……もしも運命がひどく辛く当つて来るなら、何もこつちから頭を下げて、お恵みをお願い申すことはありません。てんから馬鹿にしてせせら笑つてやるがいいです。さもないと、向うで笑い出しますからね。』まあそんな風に言つたんだ。……

「二年ほどして、その男をこつち岸へ渡していると、しきりに手を擦こすつてにこにこしている。『グイリノへ行くんだ。家内を迎えにね』って言うんだ、『俺が可哀そうだといって、

来ることになった。親切な思いやりのある女さ。』もう嬉しくって、息をはずませてるんだ。一日すると細君と一緒に帰って来た。綺麗な若い奥さんだった。帽子をかぶってね、胸には女の児の赤ん坊を抱いていた。色んな荷物がどっさりあった。ヴァシーリイ・セルゲイチはというと、細君のまわりをぐるぐる舞いして、いくら見ても見飽きない、いくら感心してもしたりないといった風さ。『なあ、セミヨン。シベリヤだって結構住めるさね。』『まあいいさ』と俺は思ったね、『今の内にたんと喜んで置くさ。』その時からというもの、まず一週に一度位はグイリノへ行って、ロシアから金は来てやしないか問合せるようになった。何しろうんと金が要るんだ。『この俺のために、彼女あねはあの若さと美しさで、このシベリヤに埋もれて呉れるのだ』って調子さ、『つらい境涯を俺とともにして呉れるのだ。だから俺の方でも、できるだけの慰安は与えてやらなくちやならん。…』で、奥さんの心が慰むようにと、役人連中だの色んなわいわい連だのと交際をはじめた。そこでさ、そういう手合に飲み食いをさせるは言わずもがな、ピアノもなくちやならねえ、安楽椅子の上むくいぬにやむくいぬ犬もいなくちやならねえ——飛んだお笑い草よ。…：一口に言やあ贅ぜい沢さ。したい放題さ。でも奥さんは長くは一緒にいなかった。思ってもみな。粘ね土ばちだ、水だ、空くうつ風だ、野菜もなけりや果物もねえ。ぐるりを見りや無教育な手合だの

酔つ払いだのばかりでよ、作法も何もあつたもんじやねえ。ところが奥さんはちやほやさ
 れて来た女だ、都の女だ。……厭になるなあ無理もねえさ。それに亭主にしたつてよ、も
 う旦那じやねえ、ただの移民よ。——昔の身分じやねえ。

「三年ほどして、忘れもしねえ聖母昇天節〔露曆八月十五日〕の前の晩よ。向う岸で呼ぶ
 奴がある。舩はしけを出して行つて見ると、誰だと思う——すつぽり顔まで匿した奥さんに役人
 仲間の若い旦那よ。トロイカも来ている。……で渡してやると、それに乗り込むが早いか、
 行方も知れずなりにけりさ。全く、掻き消す如く消え失せちまつた。明け方になると、ヴ
 アシーリイ・セルゲイイチが二頭立て駆けつめた。『おいセミヨン、家内が眼鏡をかけ
 た人と一緒に、こつちへ来やしなかつたかい?』『へえ、見ました』と俺、『まあ風でも
 捕まえなされ。』そこで物凄い勢で追つかけてつたよ。まる五日追つかけたんだ。その後
 で、また向う岸へ渡るときにや、舩の底にぶつ倒れてさ、板子に頭をぶち附けながら唸うなつ
 ていた。『やつぱり、こうなつちまつたね』つて俺は言った。笑いながら、例の『シベリ
 ヤだつて結構住めるさ』を持ち出してやつた。それを聞くと奴さん、ますますひどく頭を
 ぶつめた。……

「そのうちに、今度は自由の身になりたくなつた。まんまとロシヤへ落ちのびた女房に牽

かされるのさ。会いたいし、男との仲も割ききたいし。そこでお前、毎日のように郵便局へぶつ飛ばしたり、町の長官の所へお百度を踏みだした。特別の御慈悲でもってどうぞ家へ帰して下されと、ありったけの請願書を出した。電報代だけでも二百両は掛つたと言つてたつけ。畠地は売る、屋敷はユダヤ人に抵当に取られる。目立って白髪がふえて、腰は曲るし、顔の色と来たら肺病やみみたいに黄色くなった。話をしても、しよっちゅうはあはあ言つてよ、眼にや涙を出してるんだ。請願書騒ぎで八年も苦しみ通したが、今じやまた元氣が出て陽氣になった。新規な道楽が出来たのさ。それ、あの娘が大きくなったのよ。もう可愛くつて眼の中へでも入れたい始末よ。まったくいい娘さんさ。別品さんで眉毛が黒くつて、はきはきして。日曜には欠かさずグイリノの教会へ二人で出掛ける。艇に二人並んで立つてると、娘さんはにこにこ笑う。それをまた、親父さんは傍からじつと眼も離さねえ。『なあセミヨーン』つて言うんだ、『シベリヤだつて結構住めるなあ。シベリヤにだつて幸福はあるさ。まあ見て呉れ俺の娘を。ぐるり千露里さがしたつて、こない娘はいまいな。』『全く、本当にいい娘さんを持ちなすつた……』口じゃそう言いながら、俺は心の中で考える、『だが待てよ。……何しろ若い娘さんのことだ。胸の血も躍るだろう、生き甲斐のある生活もしたかろう。だがここにや生活はないんだ。』すると

やっぱり、だんだん陰気な娘こになった。……やつ裏れて、げつそり瘦せて、病みついて、今じや碌々腰も立たないんだ。肺病さ。

「これがつまり、シベリヤの幸福の正体よ。大したもののさ。シベリヤだつて結構住めるつてのは、つまりこれよ。……そこで今度は医者つていう医者を探し廻つて、家へ連れて来ることになった。医者か禁まじない厭いや師しがいることが耳にはいりさえすりや、五十里が百里先でも直ぐ迎えに行く。医者に払う金だけでも大したものよ。だが今となつちや、その金で飲んだ方が利口だと思ふね。……どっち途死ぬんだ。いくらじたばたしたつて死ぬ。そこであの男の一生もお仕舞いだ。愁歎のあまり首でも縊るか、それともロシヤへ逃げて行くか、どつちかに極つてゐる。逃げて行きや捕まる。それから裁判だ、徒刑だ、笞刑ちげいだ……。」「それでいいんだ、いいんだと」と、寒さに縮み上りながら鞭ダツタン鞭むち人が咳つぶやいた。

「女房、それに娘……。徒刑が何だ、悲しいが何だ。その代り女房にも娘にも会えたじやないか。……お前は何にも要らねえつて言う。だが何にも無いつていうことは、よくねえ。細君が三年一緒にいた。これは神様から授かつたんだ。何にも無いつていうなあよくねえ。三年つていうのは有難てえ。これでも分らないかい？」

ぶるぶる顫えながら、少ししか知らないロシアの言葉を一生懸命に拾いながら、韃靼人は吃り吃り話して行つた。——遠い異境の空で病死して、冷たい赤錆色の土に埋められるのは、神様の思召しではない。もし妻が一日でも一時間でも来て呉れたら、その幸福の埋め合せにはどんな艱難もよろこんで忍ぼう。神様にも感謝しよう。何も無いよりは、たとい一日の幸福でもあつた方がいい。……

それから、どんな美しい賢い妻を家に残して来たかをまた繰り返して話し、両手で頭を抱えて泣き出しながら、自分は何にも悪いことはしなかつた、無実の罪を受けたのだとセミヨーンに訴えた。彼の二人の兄弟と叔父さんが、或る農夫の馬を盗み出して、その老人を半殺しの目に逢わせた。ところが組合の詮議が間違つて、兄弟三人ともシベリヤへ送られて、金持の叔父さんが平気で残つてゐるような判決を下した。

「今に慣れるつてことよ」と、セミヨーンは言つた。

韃靼人は黙つて、泣きはらした眼でじつと火を見つめた。腑に落ちぬような、怯えているような顔附である。なぜこんなじめじめした暗闇の中に、見も知らぬ人間の傍に居るのか、なぜここがシンビルスク県でないのか、まだ分らぬといった風だ。『先生』は焚火の傍に横になつて、何やら薄笑いをしたかと思うと、小声で唄いはじめた。

「全く、あんな親父と一緒にいて何が面白かる」と、やがて彼は言った、「そりや娘を可愛がつている、娘を唯ひとつの慰めになっている。そりやそうだ。だが兄弟、あの男の前じやうつかりした事あできねえ。喧し屋やかまのおつかない爺さんよ。だが若い娘さんにや喧し屋は禁物だ。……娘さんというものは、ほいほい可愛がつて貰いてえんだ。それに香水だ、ポマードだ。そうさ。……やれやれ厄介な。」セミヨンは歎息して、大儀そうに起き上った、「ヴオトカもなくなつた。どれ、そろそろ寝るとしようか。なあ、俺は行くぜ、兄弟……」

一人になると韃鞨人は粗朶を投げ添えて横になつた。そして火を見つめながら、故郷や妻のことを思つた。ひと月でも一日でも来て呉れればいい。その上でもし厭だつたら、帰つて行くのは勝手だ。一月でも一日でも、何にも無いよりはしました。だが、もし妻が約束通りに来たとしたら、何を食べさせたらよからう。何処に住ませたものだろう。

「食うものが無くつて、生きて行けるかね」——韃鞨人は声を出して訊いた。

夜昼なしに橈かいを動かしつつづけても、一日の賃銀は十コペックだった。尤も旅行者が心附けや酒代を呉れることはあつたが、そういう貰いは仲間がみんなで分けて、韃鞨人には一文も呉れずにただ嘲笑あざわらつた。金のない彼は空腹で、寒くつて、びくびくしていた。……

身体じゆうずきずき痛んで顫えがやまぬ今こそ、小屋へはいつて寝た方がいいのだが、小屋には包くるまるものもなく、川岸にいるより寒いのだ。ここにいても包くるまるものはないが、せめても焚火ぐらいはできる。……

一週間して水嵩が落ちると、舂はしけが出せるようになる。するとセミヨーンの他の渡船夫は、みな要らなくなる。韃靼人は村から村へと、施物ほどこしや仕事を捜して歩くことになる。妻はまだ十七だ。美人で、わがままで、羞はずかしがりだ。あの女が顔も隠さずに、施物を貰いに村々を歩くことになるのだろうか？ いいや、そんなことは考えるだけでも怖ろしい。……

夜が明けて来た。舂の形も、水に浸った柳の藪も、川波も、もうはつきり見分けられる。振り返って見ると、粘土質の断崖があつて、そのすぐ下に褐色の藁で葺いた小屋がある。

崖の上の方には、村の百姓家がごちやごちやと塊まつている。村ではもう鶏が歌っている。赤銹色をした粘土の断崖、舂、河、他国の性たちの悪い男達、飢え、寒さ、病氣——ひよつとしたら、これはみんな嘘なのだ、きつとこれはみんな夢なのだ、と韃靼人は考えた。自分が寝入ったような気がして、自分の舂いびき声が聞えた。……ここは言わずと知れたシンビールスク県の家だ。ただ妻の名を呼びさえすれば、すぐ返事が聞えるのだ。隣の部屋にはお袋がいる。……それにしても何という怖ろしい夢を見ていたものだ。あれはどうした夢だ

ろう？ 韃靼人は微笑んで、眼を開けた。これは何川だ？ ヴォルガかしら？

雪が降って来た。

「おおい、出せよう」と、誰やら向う岸で呼んでいる、

「平——底——船よう。」

韃靼人は眼がさめた。そして向う岸へ舟を出すため、仲間を起しに行く。ぼろぼろの皮衣に歩きながら手を通し、唳れた寝呆け声で口汚なく罵りながら、寒さに縮み上つて、渡船夫たちは岸に姿を見せた。眼醒めたばかりの彼らには、膚を刺すような寒風を吹きつける河が、ぞつとするほど厭わしいらしい。急ぎもせずにカルバスへ跳び移った。……韃靼人と三人の渡船夫は、水掻きの広い長い橈を握る。暗がりで見ると、それはまるで蟹の螯のように見えるのだ。セミヨーンは長い舵に腹でのし掛った。向うの岸ではまだ呼びつづけている。ピストルの音も二度ほど響いた。渡船夫が寝こけているか、それとも村の居酒屋へ出掛けたとも思つたのだろう。

「よしよし、たつぷり間があるぞ」と、この世の中に急ぐことなど一つも無いと悟つた人のような調子で、『先生』が言う、「どっち途どうにもならねえってことよ。」

不細工な重たい舩はようやく岸を離れて、柳の藪の間に出た。柳が少しずつ後へ退つて

行くので、舟がひと所にいずにもこれでも動いているのだと覺られる。渡船夫は正しく間を置いて一斉に橈を引く。『先生』は舵に腹を押しつけて、空に半円を描いては一方の舷から他の舷へと飛び移る。暗がりの中で見ると、舟夫たちが何か長い足のついたノアの洪水以前の動物の背に乗って、時に悪夢のなかに現われて来るあの寒い憂愁の国へ、漂って行くように思われる。

柳の藪を出て広い川面に浮び出た。向う岸では、板子の軋きしりと水を打つ橈の音が聞えた。と見え、「急げ、急げよう」と叫んでいる。それから十分ほどして、舳は棧橋にどしんとぶつかつた。

「まだ降りふりくさる、まだ降りくさる」とセミヨーンは、顔の雪を拭きながら呟いた、「よくもこんなにあるこつた、呆れ返つたもんだね。」

その岸には、中背の瘦せた老人が、狐の半外套に羊皮の帽子をかぶって待つていた。馬から少し離れた所に立つて、じつと動かない。思いを一つことに凝らせたような、陰気な表情である。何かを思い出そうとして、言うことを聴かぬ自分の記憶に腹を立てたように見える。セミヨーンが傍へ行って、笑顔を作つて帽子を脱いだとき、彼は言った。――

「アナスターシエフカへ急いで行くんだ、嬢がまた悪いんでな。アナスターシエフカにや、

新しい医者が来たという噂だ。」

旅行馬車を解へ引張り込んで、漕ぎ戻す。セミヨーンがヴァシーリイ・セルゲイイチと呼んでいたその男は、厚い唇を固く結んで一点を見つめたまま、河を渡る間じゆう身動きもせずに立っていた。馭者が、旦那の前で煙草を喫わして頂きますと断ったときにも、まるで聞えぬ風で何の返事もしなかった。セミヨーンは舵に腹を当てがいながら、小馬鹿にしたような顔附で彼を見て、こう言った。――

「シベリヤだつて結構暮らせませ。暮ら・あ・せませあ！」

『先生』の顔には、まるで何かを証明してのけたような、自分の思った通りになったのを嬉しがりでもするような、勝ち誇った色があった。どうやら、狐皮の半外套の男の不幸な頼りなさそうな様子が、彼には大満足であるらしい。

「ひどい道ですぜ、ヴァシーリイ・セルゲイイチ」川岸で馬を附け終ったとき、またそう言った、「もう二週間もして、乾いてから行きなすりやいいに。それとも、まるで行くなあやめなさるか。……行つたつて何になるもんですかね。とにかく先刻御承知の通り、人間共あ年がら年じゆう夜昼なしに動き廻つてませ。だが何にもならねえ。全くでせ。」

ヴァシーリイ・セルゲイイチは黙つて酒代さかてを出して、馬車に乗つて出掛けて行つた。

「そうれ、医者を呼びに飛んで行つたぞ」と、セミヨンは寒さに身をすくめながら言つた。「ふん、本当の医者を探すなんざあ、野原で風を追つかけるも同じさ。悪魔の尻尾をつかまえるも同じさ。瘡^{かさ}つかきめが。何て可笑しな奴だ。ああ、やれやれ。」

韃靼人は『先生』の傍へ寄つて行つた。そしてさも憎らしげに嫌悪の眸をまともに向け、ぶるぶる顫えて、破^{ブローケン}格なロシア語に韃靼語を混ぜながら言つた。――

「あの人あいい人だ……いい人だ。だがお前は悪い悪い人だ。旦那あ、とてもそりやいい人間だ。だがお前は獣^{けだもの}だ、悪い奴だ。旦那は生きている、お前は斃^{くたば}つた獣だ。……神様は人間を創りなすつた――生きるためによ。喜びもあり、淋しいこともあり、悲しいこともあるようによ。だがお前は何にも要らねえつて言う。つまり生きちやいねえんだ。石なんだ、粘土なんだ。石にや何にも要らねえ。お前にも何にも要らねえ。……お前は石だ――神様はお前を愛さねえ、旦那を愛してるだ。」

皆が笑い出した。韃靼人は気難しげに眉を蹙^{しか}めて、片手を振つた。そして檻樓にくるまると焚火の方へ行つてしまった。渡船夫とセミヨンはぶらぶらと小屋の中へはいつた。

「うう、寒い。」じめじめする粘土の床^{ゆか}に敷いた藁の上に大の字なりに転がりながら、一人の渡船夫が嗄れ声を出した。

「うむ、温かくねえ。」もう一人が応じた、「まるで徒刑囚の暮らしだ。……」

みんな横になった。風に戸があふられて、雪が小屋へ舞い込んだ。誰も起きて戸を閉めに行く気はしなかった。寒いしだる懶い。

「俺はいい気持だ。」セミヨーンがうとうとしながら言う、「こんな気楽なことはねえさ」。

「お前は極道者よ。悪魔だつて攫さらつちや行かねえつてよ。」

外からは、犬の吠えるような声が聞えて来た。

「ありや何だ。誰がいるんだ。」

「鞭鞭人が泣いてるのよ。」

「へえ……何て妙な奴だ。」

「今に慣れるつてことよ。」セミヨーンはそう言ったかと思うと、もう寝入っていた。間もなく他の者も寝入った。戸は開けっぱなしだった。

青空文庫情報

底本：「チエーホフ全集 9」中央公論社

1960（昭和35）年5月15日初版発行

1980（昭和55）年10月20日再訂再版

入力：米田

校正：阿部哲也

2010年12月5日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

追放されて

В СЫЛКЕ

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>